

日本で文学研究が文化研究に軸足を移したころ、つまりざっと三十年前から、シラバスもそれなりの方向をたどり、個別作家を一年研究するというようなものから、国家、個人、社会、アイデンティティなどの項目をたて、一回読み切りを目指すかたちが増えた。英語の授業でもそうした項目の導入が増え、小皿がたくさんならんだ料理の様相を呈した。小皿ものが増えた背景には、日本が八十年代以降、ポストモダンの時代に入ったこととも重なる。どの皿がメイン（主役）、どの皿がサイド（脇役）というかたちではなく、どの皿も主役でも脇役でもない状態。そこで一汁三菜の時代にノスタルジーをおぼえる向きもまた増えてきた。せめて大学時代は一汁三菜式に学んだ方がよいという考え方だ。小皿的な世界では帰納する知恵が重要だ。本にこう書いてあった。社内報にこう書いてあった。メールで日々新たな情報が入ってくる。会議でこういう意見がでた。位相の異なる情報が多数個人に入って来る状況では、個人はよほど自らを確立していないと、破綻する。情報に翻弄される。人に翻弄される。十五回分のシラバス、および実際の授業で、いろいろな知識は身についたが、さて自分はどうか考えるのかというところが抜け落ちる。そこで三十年以上も前の古い話ではあるが、モダンな要素を意識する。大きな物語がまだ消えていなかった時代の大きな物語を意識する。小皿的なシラバスの授業と併行して、英語に一汁三菜的なシラバスを作ってみる。一汁は現代英語の背景である英語の歴史、三菜のメインディッシュは、自分の好きな作家で恐縮だが、カズオ・イシグロ、あとの副菜ふたつはイシグロテキストにあって、現代社会に生きる上で欠くことのできぬ主体や記憶といった問題。メインディッシュを決めて一度はそれにのめり込むと、敬愛と反発の反芻から、作家と自分の間に親と子の間に成り立ちうるような模倣と創造の関係が成立する。学習者は成長し、親元を離れるように個を確立する。演繹を実践できる個が、うまくすればできあがる。社会に出て、情報に翻弄されぬ個ができあがる。

こと英語ということばの学習に関しては、そこまで理屈を言わなくても、学生は自ずと実践しているようにも思える。シャドウイングという方法を半数以上が高校や中学で教わっている。自分のなかに一度、他者の声を入れてしまうことを意味するから、捨て身の策のようにも見えるが、この模倣が、自分の英語の創造につながる。

最後に少しだけ文学と文化の話に戻す。このふたつの絡み合いに三十年以上関心を持って来た筆者としては、以下の引用は我が意を得たという気持だ。

「日本における英語教育低迷の原因が文学作品の訳読にあったとする誤解が日本人の英文学離れを引き起こした」

「そもそも英文学を講じることができる教師が減っている」

「文学作品が言語のもっとも洗練された構造体である以上、文学を用いない言語教育はあり得ません」

書き手は斎藤兆史氏。出典はNHK テキスト『見つめ合う英文学と日本：カーライル、ディケンズからイシグロまで』。このなかで氏は「読むことで教養と英語が同時に身に付くような・・・作家・作品」の例として、カズオ・イシグロ、デイヴィッド・ロッジ、V・S・ナイポールの三人の名を挙げている。英語教育にあってもバランス、帰納と演繹のバランスが必要だ。